ポジティブな納税

名古屋市立丸の内中学校３年　　鈴木　友彩

私は、まだ働いたことがないので、税金を納めたことがない。しかし、これまで見聞きした内容から分かることは、世の中の人々は税金を納めたくないということだ。節税や脱税といった十分耳なじみのある言葉も人々が税を少しでも納めたくない気持ちの表れであろう。「喜税」のような言葉が存在しないことからもその証拠だと思う。このように、私のこれまでの人生で、税金というもののイメージは「嫌われ者」であった。

しかし、今までに一度だけ「税金を納めたい」と言っている人を見たことがある。それは寝たきりになっている障害がある人のテレビドキュメンタリーだった。寝たきりなので働いてお給料をもらった経験がないため、当然税金を納めた経験がない。その人が将来の目標を尋ねられたときの答えが「働いて税金を納めてみたい」というものだった。私の税金のイメージとは真逆の回答が、私の中に新鮮な驚きを呼び起こした。その番組で描かれていたのは「人の役に立ちたい」という障害を持つ当事者の切実な思いであった。自分の存在意義を他者の役に立つということに見出したい。それが重い障害があっても、介護されたり助けてもらったりするだけでなく、自分も働きたいという願望を抱く大きな理由であった。そして、人の役に立つということを単純明快に証明する手段の一つが税金を納めるということなのだ。

私は、この当事者の思いを目の当たりにして、「はたらく」ということに対する新たな視点を得ることができた。これまで仕事をして働くということは「嫌だけどお金のためにすること」だったり、夢を叶えた場合では、「好きなことをしてお金を稼ぐこと」だと認識してきた。しかし、簡単には就労することのできないほどの障害を抱えた人にとって、「働く」ということは、自分の存在によって人に喜んでもらうことであり、その他者の喜びを自分の幸せとして感じることなのだ。そして他者の役に立っていることを端的に認識することができる「しるし」が納税なのである。国家というのは国民の集合体なのであるから、国家に対して税金を納めるということは国民に貢献していることと同義だからだ。もちろん、だからといって納税していない人は他者の役に立っていないというわけではない。納税はあくまで「自分が役に立っている」ことを認識するための手段の一つに過ぎないからだ。ただ、納税する本人にとって、非常に完結明快な手段なのが納税の長所である。

働くことによって社会とつながり、人に喜んでもらい、そのことを納税という手段で認識できて自分も幸せになる。なんだかくすぐったくなるようなキレイごとに聞こえるが、でもこれを厳然たる事実として感じている人がいるのだ。何とも素敵な感覚ではないか。私も将来仕事をして納税するときには、このような気持ちで臨みたいものである。